

チンパンジー—人と動物を結ぶ生きたかけ橋

ジェーン・グドール

たいへん多くの方々に先んじてこの私が京都賞を賜りますことは、いまだに信じられないような気がいたします。このうえない榮譽に存じます。私に申せますことは、この素晴らしい幸運を最大限に活かしてゆくことをかたく誓うことしかありません。なぜなら、京都賞を受賞することは、世界中で私の信用が増すという榮譽なのです。そして、京都賞の極めて多額の副賞によって、いままでは私にできなかったことができるようになるからです。

まず、私の日本における同業の研究者の皆さんが研究を通じて、猿や類人猿をより深く理解するためにしてこられた大きな貢献を賛えることから、始めたいと思います。日本の研究者たちは、ヒトをのぞく霊長類を本格的に研究対象とし、そこから学ぼうという姿勢をとったさきがけとなりました。この国にいるニホンザルの研究を1948年に始められた今西（錦司）先生こそ、霊長類学の父と考えられます。そして、最初の直弟子であった川村（俊蔵）先生、伊谷（純一郎）先生、河合（雅雄）先生を通じて、今西先生は日本の霊長類学の一大学派を生みだされました。今西先生と伊谷先生は、1961年にタンザニアのチンパンジーの行動研究を開始され、1965年からは西田（利貞）先生が、私の調査地でありますゴンベからほんの140キロのところにありますマハレ山塊に調査基地を置かれています。マハレとゴンベでの二つの研究こそ、ほかに類を見ないチンパンジーの長期的研究の双璧をなしています。そしてさらに、杉山（幸丸）先生をはじめ、ほかの日本の霊長類学者によってアフリカのほかの地域においてもチンパンジーが観察され、またその保護のための努力の一翼が担われています。私は、こうした霊長類学の日本の研究者仲間と、この京都賞受賞の榮譽をわかち合いたいと思います。

「30年前、いったいどうしてチンパンジーの研究をすることになったのですか」と私はよく尋ねられます。私が幼い頃、夢が二つありました。ひとつは、動物に囲まれて暮らし、動物のすべてを学ぶことでした。とりわけアフリカの動物たちに惹かれていたのです。もうひとつの夢は、そうした動物たちの本を書くことでした。私はなんと恵まれていたのでしょうか。大人になってから人生の折

り返し点で、幼いときの夢がかなったと認識して背筋を伸ばすことのできる人は、そんなに数多くはいないでしょう。そして恵まれていたといえ、私の母は本当に素敵な人で、私が望んですることをいつも見守ってくれました。「ジェーンはお馬鹿さんね、女の子はそんなことをしないものよ」などと母から言われたことは一度もありません。当時、私のしたことは女の子のしないことばかりだったのですが、「もし本当にあなたのやりたいことがそれなら、一生懸命に何でもやって、チャンスを逃さないで頑張れば、きっとアフリカにだって行けるわ」と母は言ってくれました。

私の夢は、学校の友達で両親といっしょにアフリカに引っ越した人からの手紙が届いたときから、実現に向かって動き出したのです。「遊びに来たら」という手紙を読んだ私は、ロンドンでのおもしろいけれども収入の少ないドキュメンタリー映画のスタジオの仕事をきっぱりとやめて実家に帰り、ウェイトレスとして働いて給料とチップを貯金しました。とうとうアフリカへゆく往復の船の切符を買って旅立つことができたのです。

アフリカに着いてしばらくすると、「そんなに動物に興味があるのならリーキーに会うのが一番だ」と誰かが言ってくれました。それは、今は亡きルイス・リーキー先生のこと、有名な古生物学者でした。私は、すぐにその人に面会を申し入れました。リーキー先生は、私に様々な動物についていろいろ難しい質問をしました。それから何回か私を国立公園に連れていってくれました。そして私を自然史博物館で助手として雇ってくれたのです。長い話をかいつまんで言えば、私がゴンベでチンパンジーの研究を始められるだけの資金を工面してくれたのでした。

それから30年間、私は人間と同じように魅力にあふれ、ほとんどそれに劣らず複雑なチンパンジーたちと共に暮らし、学んでくることができました。チンパンジーを、私が、そして日本の研究者仲間がこうして研究し続けているのは、チンパンジーがたいへん魅力的で、しかも私達に最も近い親戚だという理由からです。まだまだ学ぶことは山ほどあります。ゴンベでは、30年たった今もお、新たな行動が観察されています。それは25年の歴史をもつマハレでも同じことなのです。

まず私がゴンベで過ごした30年を振り返る短い旅にご一緒いただきましょう。長年のあいだに知り合った生命力にあふれた個性的なチンパンジーのうちから何頭かを、紹介したいと思います。と申しますのは、ちょうど人間が一人

一人個性をもっているように、チンパンジーも一頭一頭個性をもっているからです。そして、それぞれのチンパンジーが独自の履歴をたどるのです。

私が初めてゴンベに着いたとき、最大の問題はチンパンジーが人間を怖がることでした。私が 500 メートル離れていても、私の姿を見るとチンパンジーは逃げてしまいます。それでもだんだんと、いつも同じ色の服を着るように心がけ、あまり性急に近づかないようにしているうちに、チンパンジーにもこのおかしな白い肌の猿はどうやら恐ろしい生き物ではないとわかったようでした。私を受け入れて、しまいには絶対的に信用してくれたのです。

このような当初の何か月かの困難な時期でも、素晴らしい森がいつもそこにあって、見るもの、学ぶものには、こと欠かなかったわけです。しかも世界中で自分が一番いたい場所にいたのです。そして自然とひとつになるということから得られる大いなるやすらぎを私は発見しました。私が森の中で、ひとりしていると、ちょうど日本の美しいお寺に静かにいるときとよく似た、静寂の感覚と命をあるがままに受け入れる姿勢をもつことができるのです。

私のことを最初に信用してくれたのは、白い髭のあるデイヴィッド・グレイビアドでした。とびきり素敵で、落ち着いたいてやさしい雄でした。初めて白髭のデイヴィッドが私の手からバナナをとった日のことは、決して忘れません。デイヴィッドが私にかわって、チンパンジーの世界への扉を開いてくれたのです。なぜなら、ほかのチンパンジーはデイヴィッドが私を恐れない様子を見て、自分たちも私をこわがらなくなっていくからです。

チンパンジーの社会は雄が支配する社会です。1960 年代の初めは、ゴライアスというデイヴィッドの親友がトップの座をしめる雄でした。ゴライアスがトップの座にあったのは、まず勇敢な性格だったことと、派手な突撃誇示行動ができたからです。突撃誇示行動の最中、雄は地面を駆けまわり、脚で物をけったり、じだんだを踏んだり、石を投げたり、枝をひきずったりします。飛び上がって草木をゆらし、恐ろしいすごみ顔を試みせます。言い換えるなら、雄は自分をより大きく見せ、実際よりもはるかに恐ろしげにふるまって、現実に闘うことなくライバルたちを威圧してしまうことがよくあるのです。

1964 年にゴライアスはマイクに造反されました。マイクはその年の初めには順位の高い雄で、体格はゴライアスに似て小さいほうでした。けれどもマイクは、社会的な順位を上げようとする意欲にたいへん燃えていました。マイクがゴライアスから一位雄の座を奪ったのは、とても劇的でした。マイクは突撃誇

示のたびに、私のキャンプから運んできた空の灯油カンを使うようになりました。やがて 3 個もの空きカンを次々と前方へ蹴ったりたたいたりしながら走り続けることを覚えたのです。こうしたパフォーマンスは、当時、マイクより順位の高かったほかの多くの雄たちに、たいへん恐ろしがられました。マイクがカンをたたきながら走ってくると、雄たちはたいてい、まずは逃げ、それから敬意を表してマイクのまわりに集まりました。4 か月のうちに、マイクは目標を達成して、新しいトップの座に着きました。トップの座について雄をアルファ雄と呼びますが、アルファの座をめぐる雄の順位が逆転したのです。

マイクは 6 年間、アルファ雄として君臨しましたが、6 年が終わる頃にははふけて見えませんでした。そしてマイクは、ずっと若く体重も重そうで、はるかに攻撃的なハンフリーにたった一度の闘いで敗れてしまいました。ところがハンフリーは、トップの座を保ってゆくには、賢さも社交的な技量も欠いていました。1 年後にハンフリーは利口なフィガンに敗れました。フィガンは、マイクやゴライアスと同じく小柄なチンパンジーでしたが、やはりマイクと同様に、利口で、意欲的で、社交的な技量もあったのでトップの座につけたのです。フィガンは兄にあたるフェイブンとの間に培った緊密な相互支援の絆を、うまく活用しました。フェイブンは、ポリオが流行したとき罹患したために片腕が不自由でしたが、それにもかかわらず、迫力のある直立姿勢での示威行動を覚えました。フィガンは、フェイブンが近くにいないかぎりには、体の大きなハンフリーに、挑戦しようとはしませんでした。そして兄弟はチームを組んで示威を行い、月日がたつにつれてハンフリーは緊張して神経質になってゆき、フィガンはますます自信たっぷりになりました。そうこうして 1973 年にフィガンはハンフリーを不意打ちにかけ、念願のアルファ雄の座についたのです。以後 10 年間、フィガンはアルファ雄でした。

いったいどうして、雄によっては社会的順位構造の中の自分の地位を高めたり、保とうとして多大なエネルギーを費やすものがある一方、ジョメオのようにゴンベキっての体格の大きい雄にもかかわらず、まったくこうしたことがらに関心を示さないかのようにふるまうものがあるのでしょうか。何割かはそれぞれの遺伝的特質によるのでしょうか。しかし、残りの何割かは、それぞれの母親による育てられ方、家族構成、年長の兄弟がいる場合はその性別、そしてそのほかの幼年時代の経験にもまたその答えがひそんでいるにちがいありません。フィガンの母親フローは、1960 年代初頭に私が知り合ったときにはすでに年老

いていました。フローは子供をよくかばう母親であり、攻撃的で、ものおじせず、雌の中では順位はトップでした。フィガンは、このフローの二番目の息子で、子供時代のいさかいのすべてに母親と兄のうしろだてを得ることができました。こうしてフィガンは一生の早い時期に、順位の高いものに特有の自信というものを身につけたのでした。

フィフティはフローの三番目の子供で、母親ばかりでなく、しばしばどちらの兄か両方の兄たちに助けられて育ちました。フィガンと同じように、フィフティも順位の高い、ものおじしない雌になりました。フィフティの初めての子、フロイドはフィフティが13歳になった1971年に生まれました。おばあさんにあたるフローは、まだ生存していて、フィフティはその頃もまだ長い時間をフローのかたわらで過ごしていました。

フロイドが2歳のとき、おばあさんのフローが死にました。フィフティの弟のフrintは、年老いた母親に異常なほど頼りきっていました。それというのも、母親のフローが年にとって弱り、ちゃんと乳離れさせてやれなかったのが主な原因でした。8歳になってもフrintは、まだ夜は母親のベッドで寝て、おんぶをねだったりしていました。そのためフローが死ぬと、フrintは母親なしでは生きてゆけないというふうに見えました。フrintはふさぎこみ、ものを食べようとせず、ほかのチンパンジーたちを避けました。このような悲しみの状態のうちに、体全体の免疫が弱ったのでしょうか、フrintは病気になって死んでしまいました。母親が死んでから、ほんの数週間のことでした。

一方、フィフティはますます強くなっていきました。母親のフローがそうであったように、フィフティは手際がよく、抱擁力もあり、しんぼう強く愛情の深い母親になったのでした。フロイドは大柄で健康な子で、ちょうど5歳で乳離れすると、弟のフロドが生まれました。フロイドはこの赤ちゃんに夢中になり、母親が許すようになると、毛をつくろったり、遊んでやったり、運んでやったりして、過ごしました。フロドはといえば、いつもお兄さんを見てまねをしていたので、おませに育ちました。フロドが5歳のとき、フィフティは時計じかけのようにまた出産して、今度は娘のファニイが生まれました。するとフロドは喜んで妹と遊んだり、妹を運んでやったりしたのです。この頃までにはもう10歳になっていたフロイドも、ほかの雄と行動して長いあいだ家族から離れていたにもかかわらず、妹のめんどうを見ました。こうして、家族同士の親密でたがいに支え合う絆は、たえず強化されてゆきました。

今日、フィフィは 5 頭のチンパンジーの母親となり、ファニイの下には妹のフロシがいて、赤ん坊のファウスティノが最年少です。

フィフィは雌の中でも、とりわけうまくいった母親といえます。現在、子供は全員生存していて、そのうち 3 頭は性的に成熟しています。もういつおばあさんになっても、おかしくありません。そのくせ 32 歳くらいにしかなくなっていないから、チンパンジーとしての余命 15 年ほどの間に、まだ 2 回は出産できるかもしれません。

多くの雌たちにとっては、出産と子育てはそんなにうまくはいきません。例えばこのパラス。素敵な、気がつく、遊ばせ上手な母親でした。ところがとても不幸でした。はじめての子が 3 歳のとき、病気で死んでしまいました。ほどなくしてパラスは、母親をなくしたスコージャという 5 歳の雌の世話をし始めたのです。スコージャの母親はパラスの姉か妹だったのかもしれませんが。だとすればパラスはスコージャの実のおばさんにあたるわけです。

スコージャを養子にしてからしばらくたって、パラスは出産しました。ところが数週間でこの赤ん坊は姿が見えなくなりました。何がおこったのかは、わかりません。それから 1 年ほどしてパラスはふたたび出産して、私達はかわいらしい赤ん坊をクリスタルと名づけました。この経過を知らない人が見たら、誰でもこれは普通の家族で、母親と親離れしていない姉妹と思ったことでしょう。スコージャは、本当の家族のようになじんでいました。

クリスタルが 5 歳のとき、つまりスコージャが母親をなくしたのと同じ年頃に、パラスが病気で死んでしまいました。スコージャは、そのとき 11 歳で、幼いクリスタルを世話しようとしていました。見ていて胸がいたみました。それでもスコージャは、まだ未熟で自分自身がまだ精神的に不安定で、母親をなくしたクリスタルに必要なやすらぎを与えてやれなかったようでした。孤児の姉妹はいっしょにさすらい、何週間かたつうちにクリスタルはだんだん生気を失って、ついに母親の死から 6 か月ほどで病気になり、やはり死んでしまいました。こうしてパラスの血筋は絶えてしまったのです。

いつも私は母子の関係に最も心を奪われてきました。野生であるか飼育下にあるかを問わず私がチンパンジーから学び確信するに至ったことに、幼少の経験、とりわけ母親の個性と子育ての上手下手こそ、おとなになったときの性格形成と行動に大きな影響を及ぼすということがあります。このことは、私達の子供たちにとっても、やはり同じように、あるいはそれ以上に、あてはまるの

だと固く信じるようになりました。

私に1967年、息子が生まれたとき、息子のそばになるべく長くいてやる事がとても大切に思えました。私はチンパンジーの母親たちが子供に接して得ている大きな喜びを観察して知っていましたから、私も息子といっしょにいる時間を生かしたいと思いました。そういうわけで、ゴンベに住み続け、研究の指揮はとり続けたものの、息子が5歳になるまでは、私は、研究を中断しました。この決断を今まで後悔したことは一度もありません。

チンパンジーと長い間過ごしてみて、その行動が私達の行動にいろいろとよく似ていることに驚かないわけにはいきません。

母親に頼りっぱなしの長い子供時代は、人間と同じように、チンパンジーにとっても学習の時期として重要です。チンパンジーの家族の中で、そして時には血のつながらないものどうしの間でさえ、親密で愛情に満ちた、たがいに支え合う絆が培われ、それはときには生涯にわたって続きます。

チンパンジーとヒトでは、言語によらないコミュニケーションの様式が実によく似ています。どちらの種にとっても、親しげなスキンシップが社会的な和を保つうえで重要な役割をはたします。このことは子供時代にけがをしたり、怖がったりする子供のそばで、母親がなだめてやり、不安をとりのぞいてやる毎日の中から生まれてくるにちがいありません。子供が親離れするにしたがって、今度はその子供は、自分の社会の中の親しい他人に、同じようなやさしさを求めるようになるのです。チンパンジーは人間と同じように、キスをしたり手をつないだり、たがいに抱き合います。私達も、やはりよく似た状況のもとで、こうしたしぐさを繰り返します。

2頭のチンパンジーが、思いがけない食べ物を発見すると、興奮し、キスをして腕をひろげて抱き合います。

おびえた雌が、おとなの雄の体にふれて、大丈夫だと自分にいきかせます。

再会したものどうし、キスをします。狩りがうまくいったあとで、獲物をせしめたものが、まわりに寄ってきて肉をねだって手をさしだすものに、肉を分け与えることもあるのです。ついでにいうと、チンパンジーは狩猟などで、かなり複雑な行動上の協力を見せます。

チンパンジー社会における威嚇のしぐさは、私達のそれと似かよっています。腕をふりまわしたり、二本足で立って肩をいからせて歩きます。おとなの雄は、ときには自分より弱いものを攻撃することもあります。こうした攻

撃はたいていほんの一瞬のことで、あとで弱いほうが近寄って従属の意をしめす前かがみの姿勢をすれば、雌であれ雄であれ、たいてい強いほうは、その背中をやさしくたたいたり、抱きかかえたり、キスをしたりして安心してよいことを伝えます。そのように、一般に同じ単位集団のものどうしの関係は親しげで、くつろいでいます。

しかし隣接する単位集団間の接し方となると話は別です。よそものを扱うときチンパンジーがかなり暴力的になりうることは、もうわかっています。おとなの雄はなわばりの境界を定期的にパトロールします。音をたてずに警戒した様子で、たがいに身を寄せ合って行動します。もしも隣の単位集団のチンパンジーの姿を見つけたら、特にそれがおとなの雌だった場合、全員で追跡します。追いつめて皆で袋だたきにします。5、6頭の雄がいつせいに、あるいは順々に攻撃するのです。このようにして攻撃されると深い傷を負ったり、またその傷がもとで死んでしまうこともあります。人間と同じように、チンパンジーにも暗黒の側面があるのです。事実、あるとき4年間にわたって、私の主な研究対象であった単位集団のチンパンジーの雄たちが、隣の小さな単位集団のチンパンジーに原始的な戦争をしかけ、1頭ずつ殺してついに全滅させてしまいました。

ところでチンパンジーの感情はどうでしょう。チンパンジーと間近に接した人はほとんど例外なく、チンパンジーも人間が幸せとか満足とか悲しみとか絶望と呼ぶ感情を味わっていると確信しています。

またチンパンジーは、私達が人間にしかないと思ひこんでいたような様々の知的能力を披露してくれます。ものごとを考えたり、単純な問題を解くことができますし、野生のチンパンジーは、私達人間をのぞけばほかの動物と比較して、多くの目的のためにより多くのものを道具として使うことができます。ゴンベで最も頻繁に使われる道具は、シロアリを釣りあげる小枝や草の茎などです。また、あらゆる用途に応じて、棒切れ、木の葉、石ころなども使われることがあるのです。重要な発見としては、アフリカの各地のチンパンジーが異なった文化的習慣をもっているということがあげられます。例えば、マハレのチンパンジーは1965年から西田先生たちの調査隊が研究していますが、オオアリを小枝で釣りあげて食べるのにかなりの時間を費やします。ゴンベにもこのアリはたくさんいますが、ここのチンパンジーは食べません。ゴンベのチンパンジーがよく食べるのは、どう猛で人を咬むサファリアリで、皮をむいた長い小枝を使って、ほんとうにおいしそうに食べるのです。一方、マハレではこのア



りには見向きもしません。また西アフリカでの研究では、堅い殻をもった木の実をチンパンジーが金床と金槌を使う要領でたたき割るのが観察されています。これと同じことが、東京の多摩動物公園のチンパンジーでも見られるのです。若いチンパンジーは、その集団のこうした様々な習慣を、ちょうど人間の子供たちと同じように、見て覚え、見よう見まねで練習して学んでゆくのです。

チンパンジーには素晴らしい記憶力があります。少し先のことを考えて行動することもできます。例えば、離れていて、そこからは見えないところにあるシロアリの塚で使おうとする釣り道具を、前もって選ぶのです。また松沢（哲郎）先生とチンパンジーのアイなど、研究施設のチンパンジーの研究では、チンパンジーがコミュニケーションのための抽象的な記号などを使って複雑な概念を理解できることが報告されています。アメリカでも、聾啞者の使う手話の300かそれ以上のサインを学習したチンパンジーもいて、このチンパンジーたちはまったく新しい組み合わせを作ったり、必要に応じて新しいサインを発明したりするそうです。

私達のこうした親戚たちの野生における将来は、けっして明るいものではありません。今世紀の初めには、何十万というチンパンジーが25か国にわたって生息していました。現在では多く見積もっても25万頭が、生息域の中心部にある4か国に残っているだけです。チンパンジーが減ったのは、森林が破壊されているからです。畑の開墾や先進消費国による木材の伐採が進む一方、アフリカの国々では食肉としてチンパンジーが狩猟の獲物となっているのです。食肉としない地域でも、母親がねらい撃ちにされて赤ん坊が生けどりにされています。こうした赤ん坊の多くは売られる前に、けがやショックがもとで弱って死んでゆきます。捕らえられたショックに耐えても、必ずといってよいほど、小さな檻やかごに入れられ、そのうえ手足を縄や針金でしばられて輸送されるのです。このような悪夢のような旅の果てに、赤ん坊は業者にわたりますが、業者の飼育施設は劣悪なことこのうえなく、若いチンパンジーを世話をするのに欠くことのできないもの——つまり、人間の赤ん坊と同じく、ミルクとそれにもましてやすらぎと愛情——の必要を理解して与える人がめったにいません。こうしたものが欠けるため、ここでも数多くの赤ん坊が死んでゆきます。ペットとして買いとられてゆくものもいます。しばらくの間は、家の中や庭で自由に過ごせるかもしれませんが、この自由は5、6歳になるとおしまいになります。チンパンジーは力が強くて、場合によっては危険だからです。ふたたび

小さな檻に入れられます。ちょうど 5 歳のソクラテスという名のチンパンジーがそうでした。あるいは鎖につながれてしまいます。ウイスキーは 2 年以上、たったの 60 センチしかない鎖につながれたままなのです。こうした元はペットだったチンパンジーの中には、ブラザヴィルのグレゴワールのようにアフリカの動物園にひきとられることになるものもいます。また各国を巡業する見せ物業者に売られて、窮屈な衣装を着せられて、人に笑われ、いうことをきくようにとたたかれるものもいるのです。あるいは、実験動物として医薬品産業の実験施設に売られてゆくのです。

実験施設にもよりますが、チンパンジーにとっては、まるで強制収容所の囚人が味わう経験に等しい状態でしょう。ワシントン D.C. にあるアメリカ政府の出資する実験施設では、赤ん坊のチンパンジーが 2 頭ずつ、積み重ねられた縦・横・高さが 50 センチ・50 センチ・60 センチの小さな檻に入れられて、肝炎ワクチンの実験に使われる出番を待っているのです。

チンパンジーが生理学的、生化学的、解剖学的に人間に似ているからというだけの理由で、その生きた体を人間の病気の研究解明に使っている多くの科学者たちが、それでいてチンパンジーがやはり人間と同じように考え、道理をわきまえ、そのうえ感情をもつ生き物だということを納得するのはおろか、考えてみようともしないというのは、なんと悲しいことなのでしょう。この無知蒙昧こそが、チンパンジーの虐待を招いたものにほかなりません。虐待するものが恥ずかしくなるほどの虐待なのです。かりに人間の病気のことを理解するためにチンパンジーをどうしても使わなければならないとしても、今よりもずっとましな方法があるはずです。そして実際に、まだまだ改善の余地はあるとはいえ、はるかによい環境の研究施設もあるのです。

私にとって、このようなチンパンジーを見て歩くことは、悪夢を見るようなものです。しかし、私は行かなくてはなりません。少しでも助けになろうとするのであれば、この目で見なければならぬのです。

チンパンジーは、長いあいだ私に、とても多くのものを与えてくれました。今、私はその借りを返す努力をしなければならない時期にきています。私はこの目で確かめた残酷な扱いに対して発言してゆかなければなりません。チンパンジーは、ものを言えないからです。そういうわけで、ジェーン・グドール研究所は実験施設の環境改善を求めて法制化の陳情活動を行い、研究会を開き、また小さな檻に閉じこめられているチンパンジーたちの退屈を軽減させられる

方策をさぐっています。またアフリカで、狩猟や密猟で捕えられたり、母親を撃ち殺されて孤児になった赤ん坊の何頭かでもひきとってやれる保護施設を、建設できるように資金集めをしています。また世界中で、現状の認識をうながし、理解を増すための努力を行っているのです。

チンパンジーの行動が一つ理解できると、自然界における私達人間の位置づけが以前より少しわかってきます。いやでも少しばかり謙虚にさせられる気がしてきます。結局のところ、人間は単独で繁栄しているのでもないし、私達以外の動物界の生き物たちとの間に、越えられない深い溝が横たわっているわけでもないのです。チンパンジーは、私達人間に明らかによく似た特徴をもつことで、人間の想像の中にだけ存在する溝を埋めてくれるのです。一たびこのことが理解されるならば、私達がこの地球上で共存するほかの動物たちに対しても、新たな尊敬の念が生まれることを、私は希望します。

さて、こういう話をしましても、本当に人間という動物は真実とてもユニークな生き物であるということは否定のしようがありません。私達は様々な面で、私達のいちばん近い親戚と異なっています。例えば、私達には言語というものがあります。言葉をかかわすことによって、私達は遠い将来のことでも計画することができます。子供たちに、今すぐには目にはできない物や出来事について教えてやることができます。そしてさらに大切なことは、考えを述べ合い、たがいに意見を出し合ってその考えを新しい形にかえ、発展させてゆくことができるのです。知能のうえで私達人類は大きく進歩し、ついにはいちばん頭のよいチンパンジーでさえもけっして追いつけないところまで、ひき離してしまいました。世界中のあちこちで、それぞれのヒトの集団の道徳・価値観というものが、つきつめて考えられてきました。そして、何にもまして私達は自分たちの運命というものに対して、いくらかはコントロールできるような力をもつようになってきた、少なくとも私はそう信じています。つまり私達は頭脳の力を使ってある程度は、私達の生物としての素質がもたらす必然を克服する能力をもっているということなのです。

私達が知能をもっていたから、そして私達が種として非常に成功して子孫を殖やしてきたからこそ、かつて美しかったこの地球がここまで破壊され、汚染され、人口過密になったのです。

ルイス・リーキー先生が、発掘し、研究した石器時代の人々は、自然界で生きながらえるために戦わなければなりませんでした。鋭い爪も牙もなかった人

類の祖先は食べ物を求めて狩りをし、武器を製作し、住居を建てるために頭脳をつかいました。人間は数も少なく、道具も武器も単純でした。しかし人間の知能がどんどん複雑化するとともに、技術のほうも複雑化してゆきました。私達の有史以前の祖先は、環境をもっとうまく克服し、もっと子供を生き育ててゆくために必要な道具も武器も薬も、持たなかったからこそ、自然と調和して生きてゆけたのです。同じことが、いわゆる「原始的」な生活を今なお続けている人々についてもあてはまります。ちょっと見ると現代の文明人は、祖先たちよりも目の物質的利益に関して貧欲なように見えますが、これは欲求を満たすために必要な技術と技能を手にいれただけのことにはすぎません。そして今、突然に私達は種としての自覚にめざめ、思慮の足りない、利己的な性向が自分たちをとりまく世界をどれほど破壊していることかと気づいたところです。

私達は、環境に対してこのような大規模の破壊をひきおこしえた、唯一の種なのです。大事なことは、とうとう私達が問題の重大さに気づきはじめたところだとしても、いったい何ができるのかということなのです。希望はまだあるのでしょうか。

私は、希望はまだもてると信じます。私はヒトという種に対して、絶大な信頼を寄せています。100年前、普通の人たちの多くは人間が空を飛んだり、月に行ったり、同時に日本とアメリカにいて話をしたり、衛星を使って映像を送ったりする日が将来くるかと尋ねられて、まさかと答えたことでしょう。しかし、私達はそれらすべてをやっつけてしまいました。もっと多くのことをしています。ですから、今日、地球的な規模の環境破壊を目の前にして、背水の陣の私達は、世界中の人々が協力することができるならば、なんとかしてその破壊の波をくい止めることができるでしょう。環境を太古の昔の姿にまで復元することは無理でしょうが、現在ある自然は救えるのではないか、こんなに無造作に傷つけてしまった地球を、いくらかはよくしてやることのできるのではないかと思います。

考えることができ、感情をもつ生き物は、人間だけではないと気づいた人たちが増えています。どこを見ても、人間以外の動物に対してもっと理解をもって、動物たちが私達と同じように痛みを感じ、幸せ、悲しみ、おそれを知ることができる気づきはじめた人たちがいます。動物であっても、私達と同じように理解と愛情をもって処遇される権利をもつということに気づきはじめた人たちがいるのです。

私にとって、虐待は人間の罪の中でも最悪のものです。ひとたび私達が、動物達も肉体的にも精神的にも苦しみを味わうのだと知るならば、動物虐待は人間に対する虐待と同じ悪としてみなすべきです。私達の社会の中に、とりわけ私達の子供達の中に、すべての生き物に対する尊重の念をはぐくむことができないかぎり、人類が可能性を十分に発揮して前進を続けることは望めないと考えます。子供達に生物の授業でカエルの脊髄をひっぱり出すように指導するとすれば、それは子供達を残忍にし、感覚を麻痺させることにほかなりません。やがて、その分だけ犬をいじめたり、チンパンジーやひいては人間を痛めつけやすくなるということなのです。もっと愛護精神のある倫理、すなわちすべての生き物の命を尊重するように指導することが、人間以外の動物の福祉改善のためだけでなく、私達の精神的な発展のためにも望ましいと思います。人間は完璧にはなりようもありませんが、私達が今日、低迷しているところよりは、はるかに高い次元の道徳的な在り方を目指してもよいはずです。

地球にとって、つまり環境とすべての生命体にとっての最大の希望は、世界中のより多くの人々がこの問題を認識し、なにか手助けをしたいと思っていることです。特に若い人々がそうです。そして私達すべてにとっていちばん大切なのは、私達一人一人が力になれると認識することです。一人一人が改革の力となれるのです。この私が皆さんになにをしていただきたいとか申し上げる立場にいるわけではありません。それは一人一人が自分の胸に聴いてみるよりほかはありません。そして、できることを行動に移すしかないのです。

もうひとつお話をご披露して終わらせていただきます。動物園で飼われていたチンパンジーの話です。名前はオールド・マンといいます。医生物学の実験施設で何年か飼育されたのち、役にたたなくなってから、水にとり囲まれた人工の島に移されました。オールド・マンのほかには3頭の雌がいて、みんな人間に虐待された経験をもっていました。それからもう一人、登場人物がいます。若い男のマルク、飼育係でした。

「あいつらの近くに寄ってはいけないよ、なにしろ人間を憎んでいるからな。殺されてしまうよ」といわれていました。

それで、しばらくの間、マルクは島のそばまでボートを漕いでゆくと、岸に食べ物を放り投げて帰っていました。ところが日がたつうちに、だんだんとチンパンジーを見ているのが楽しくなってきたのです。食べ物を持ってゆくと、4頭は喜び合い、抱き合ったり、キスをしたりするのです。また赤ん坊が生まれ

ました。するとオールド・マンが、自分の子供であるその赤ん坊に、とてもやさしくするのはです。マルクは考えました。「こんなに素晴らしい動物を前にして、何のかわりもないような顔をしていては、ちゃんと世話をしてやっているとはいえない」と。

そこでマルクはゆっくりと接近してゆきました。ある日オールド・マンは、マルクの手からバナナをとるようになりました。それからしばらくすると、ついに島に足を踏み入れることができたのです。やがて、初めてマルクとオールド・マンが接触した日、マルクはオールド・マンを毛づくろいしたのです。友だちになったのでした。

ところが、ほどなくして、島を掃除していたマルクは、足を滑らせて転んでしまいました。赤ん坊のチンパンジーが驚いて叫びはじめました。母親はすぐに子供をかばって突進し、マルクがうつぶせに倒れているその頸すじにかみつきました。ほかの雌たちも、チンパンジーの雌らしく仲間の助太刀にかけつけました。1頭は腕を、もう1頭は脚にかみつきました。マルクはもう殺されると思いました。

次になにが起こったでしょう。オールド・マンが島の遠い端からとんできました。人間の友だちを助けるためにやってきたのです。マルクから雌たちをひきずり離し、脇にはらいのけました。そしてマルクがなんとか自力でボートまでたどり着き、危機を脱するまでオールド・マンは雌たちを牽制してそこにとどまったのです。

何か月かたって、退院したマルクは私にこういいました。「ジェーンさん、私は思うんですが、オールド・マンは絶対、私の命の恩人ですよ」

この話がどうして私にとって、とても象徴的なのか申しませう。もしもチンパンジーが、しかも人間に虐待された覚えのあるチンパンジーが、種の壁を越えて人間の友達の窮地に救いの手をさしのべることができるのなら、私達が、人類に与えられたより大きな愛とより大きな理解によって、今度はチンパンジーの、そしてそのほかの動物たちの窮地に救いの手をさしのべることくらいできないはずはないでしょう。

ご静聴ありがとうございました。